

風琴と魚の町

林芙美子

青空文庫

1 父は風琴を鳴らすことが上手であつた。

音楽に対する私の記憶は、この父の風琴から始まる。

私達は長い間、汽車に揺られて退屈していた、母は、私がバ

ナナを食んでいる傍で経文を誦しながら、泣いていた。「あなた

に身を託したばかりに、私はこの様に苦勞しなければならぬ」

と、あるいはそう話しかけていたのかも知れない。父は、白い風

呂敷包みの中の風琴を、時々尻で押しながら、粉ばかりになつ

た刻み煙草を吸っていた。

私達は、この様な一家を挙げての遠い旅は一再ならずあつた。

父は目蓋をとじて母へ何か優しい氣に語っていた。「今に見いよ」

とでも云いっているのであらう。

蛭えんえん々とした汀なぎさを汽車は這はっている。動かない海と、屹きつりつ立し

た雲の景色けしきは十四歳さいの私の眼めに壁かべのように照り輝かがやいて写った。そ

の春の海を囲んで、たくさん、日の丸の旗をかかげた町があつた。

目蓋をとじていた父は、朱あかい日の丸の旗を見ると、せわしく立ち

あがつて汽車の窓から首を出した。

「この町は、祭でもあるらしい、降りてみんかやのう」

母も経文がっさいぶくろを合財袋がっさいぶくろにしまいながら、立ちあがつた。

「ほんとに、綺麗きれいな町じゃ、まだ陽ひが高いけに、降りて弁当の代

でも稼かせぎまつせ」

で、私達三人は、おのおのの荷物を肩かたに背負つて、日の丸の旗

のヒラヒラした海辺の町へ降りた。

駅の前には、白く芽立つた大きな柳やなぎの木があつた。柳の木の向うに、煤すすで汚れた旅館よこが二三軒並げんんでいた。町の上には大きい綿雲が飛んで、看板に魚の絵が多かつた。

浜はま通りを歩いていると、ある一軒の魚の看板の出た家から、ヒュツ、ヒュツ、と口笛くちぶえが流れて来た。父はその口笛を聞くと、背負つた風琴を思い出したのであろうか、風呂敷包みから風琴を出して肩にかけた。父の風琴は、おそろしく古風で、大きくて、肩に掛かけられるべく、皮のベルトがついていた。

「まだ鳴らしなさるな」

母は、新しい町であつたので、恥はずかしかったのであろう、ちよつ

と父の腕^{うで}をつかんだ。

口笛の流れて来る家の前まで来ると、鱗^{うろこ}まびれになった若い男達が、ヒュツ、ヒュツ、と口笛に合せて魚の骨^{たた}を叩いていた。

看板の魚は、青^{あお}笹^{ざさ}の葉^{あざと}を鰓^{たい}にはさんだ鯛^{たい}であつた。私達は、

しばらく、その男達が面白い身ぶりでかまぼこをこさえている手つきに見とれていた。

「あにさん！ 日の丸の旗が出ちよるが、何事ばしあるとな」
骨を叩く手を止めて、眼玉の赤い男がものうげに振り向いて口を開けた。

「市長さんが来たんじや」

「ホウ！ たまげたさわぎだな」

私達はまた歩調をあわせて歩きだした。

浜には小さい船着場がたくさんあった。河のようにぬめぬめした海の向うには、柔かい島があった。島の上には白い花を飛ばしたような木がたくさん見えた。その木の下を牛のようなもののろのろ歩いていた。

2 ひどく爽やかな風景である。

私は、蓮根の穴の中に辛子をうんと詰めて揚げた天麩羅を一つ買った。そうして私は、母とその島を見ながら、一つの日麩羅

を分けあつて食べた。

「はようもどんなはいよ、売れな、売れんでもええとじやけに：

…」

母は仄かな侘^{ほの}しさを感^{わび}じたのか、私の手を強く握^{にぎ}りながら私を

引^はつぱつて波止場^{はとば}の方へ歩いて行^はつた。

肋骨^{ろつこつ}のように、胸に黄色い筋のついた憲兵の服を着た父が、

風琴を鳴らしながら「オイチニイ、オイチニイ」と坂になつた町の方へ上つて行^はつた。母は父の鳴らす風琴の音を聞^きくとうつむいてシユンと鼻をかん^はだ。私は呆^ぼんやり油のついた掌^{てのひら}を嘗^なめていた。

「どら、鼻をこつちい、やつてみい」

母は衿^{えり}にかけていた手拭^{てぬぐい}を小指の先きに巻いて、私の鼻の穴

につつこんだ。

「ほら、こぎやん、黒うなつとるが」

母の、手拭を巻いた小指の先きが、椎^{しい}茸^{いたけ}のように黒くなった。町の上には小学校があつた。小麦^{くさ}臭い風が流れていた。

「こりや、まあ、景色のよかとこじや」

手拭でハタハタと髷^{まげ}の上の薄^{うす}い埃^{ほこり}を払いながら、眼を細めて、母は海を見た。

私は蓮根の天麩羅を食うてしまつて、雁木^{がんぎ}の上の露店^{ろてん}で、プチ^{たこ}章魚の足を揚げている、揚物屋の婆^{ばあ}さんの手元を見ていた。

「いやしかのう、この子は……腹がばりさけても知らんぞ」

「章魚の足が食いたかなア」

「何云いなはると！ お父^{とう}さんやおツ母^かさんが、こぎやん貧^{びん}乏^{ぼう}しよるとが判^{わか}らんな！」

遠いところで、父の風琴が風に吹^ふかされている。

「汽車へ乗ったら、またよかも食わしてやるけに……」

「いんにや、章魚が食いたか！」

「さつち、そぎやん、困らせよつか？」

母は房^{ふさ}のついた縞^{しま}の財布^{さいふ}を出して私の鼻の上で振って見せた。

「ほら、これでも得心のいかぬか！」

薄い母の掌に、緑の粉^こを吹いた大きい式^{しき}錢銅貨が二三枚こぼれた。

「白^{ぜに}か錢は無かろうか？ 白かがないと、章魚の足は買えんと

ぞ」

「あかか銭じや買えんとな？」

「この子は！ さつち、あげんこツウ、お父さんや、おツ母さんが食えんでも、めんめが腹ばい肥やしたかなア」

「食いたかもの、仕様がなかじやなつか！」

母はピシツと私のビンタを打った。学校帰りの子供達が、わた渡し

船を待っていた。私が殴なぐられるのを見ると、子供達はドツと笑った。鼻血が咽のどへ流れて来た。私は青い海の照り返りを見ながら、しょ塩っぱい涙なみだをすす啜すった。

「どこさか行つてしまいたい」

「どこさか行く云うても、お前がどのような意地っぱりは、人が

相手にせんと……」

「相手にせんちやよか！ 遠いところさ、一人で行ってしまいたか」

「お前は、めんめさえよければ、ええとじやけに、バナナも食うつろが、蓮根も食いよつて、富限者ふげんしやの子供でも、そげんな食わんぞな！」

「富限者の子供は、いつも甘美うまかもの食いよつとじやもの、あぎやん腐くさったバナナば、恩にきせよる……」

「この子は、嫁様よめにもなる年頃としごろで、食うこツばかり云いよる」
「ぴんたば殴るけん、ほら、鼻血が出つろうが……」

母は合財袋の中からセルロイドの櫛くしを出して、私の髪かみをなでつけた。私の房々した髪は櫛の齒があたりたびに、パラパラ音をた

てて空へ舞まい上った。

「わんわんして、火がつきや燃えつきそうな頭じゃ」

櫛の齒をハーモニカのように口にこすつて、唾つばをつけると、母は私の額の上の捲毛まきげをなでつけて云った。

「お父さんが商売があつてみい、何でも買こうてやるかの……」

3 私は背中の荷物を降ろしてもらつた。

紫むらさきの風呂敷包みの中には、絵本や、水すい彩さい絵具や、運針縫ぬいがはいつていた。

「風琴ばかり鳴らしよるが、商いがあつたとじやろか、行つてみ

い！」

私はさんばし棧橋を駆け上って、坂になった町の方へ行つた。

町が狭隘せまいせいか、犬まで大きく見える。町の屋根の上には、

天幕がゆれていて、桜の簪さくかんざしを差した娘達むすめがゾロゾロ歩いていた。

「ええ——ご当地へ参りましたのは初めてでござりますが、当商

会はビンツケをもつてがま薑こう葉やくかなんぞのようなまやかしもの

はお売り致いたしませぬ。ええ——おそれおおくも、××宮様お買い

上げの光栄を有しますところの、当商会の薬品は、そこにもある、

ここにもあると云う風なものとは違ちがひまして……」

蟻ありのような人だかりの中に、父の声が非常に汗ばんで聞えた。

漁師の女が胎毒たいどく下しを買った。桜の簪を差した娘が貝殻かいがらへ

はいった目薬を買った。荷揚げの男が打ち身の膏薬を買った。ピカピカ手ずれのした黒い鞆かばんの中から、まるで手品のように、色んな変った薬を出して、父は、輪をつくった群集の眼の前を近々と見せびらかして歩いた。

風琴は材木の上に転がっている。

子供達は、不思議な風琴の鍵キーをいじくっていた。ヴウ！ ヴウ

！ この様に、時々風琴は、突拍子とつぴようしな音を立てて肩をゆする。

すると、子供達は豆まめのように弾はじけて笑った。私は占せんりよう領された

風琴の音を聞くと、たまらなくなつて、群集の足をかきわけた。

「ええ——子宮、血の道には、このオイチニイの薬ほど効くものはござりませぬ」

私は材木の上に群れた子供達を押しのけると、風琴を引き寄せ
て肩に掛けた。

「何しよつと！ わしがとじやけに……」

子供達は、断髪だんぱつにしている私の男の子のような姿を見ると、

「散剪りさんぎ、散剪り、男おなごやアい！」と囃はやしたてた。

父は古ぼけた軍人帽子ぼうしを、ちよいとなおして、振りかえつて私
を見た。

「邪魔じゃましよつとじやなか！ 早はやようおッ母さんのところへ、いん

じよれ！」

父の眼が悲しげであつた。

子供達は、また蠅はえのように風琴のそばに群れて白い鍵キーを押した。

私は材木の上を縄なわ渡りのようにタツタツと走ると、どこかの町で見た曲芸の娘のような手振りこしで腰こしを揉もんだ。

「帯がとけるとどう」

竹馬を肩にかついだ男の子が私を指差した。

「ほんま？」

私はほどけた帯を腹の上で結ぶと、裾すそを股またにはさんで、キユツと後にまわして見せた。

男の子は笑っていた。

白壁の並んだ肥料倉庫の広場には針のように光った干魚が山のように盛りも上げてあつた。

その広場を囲んで、露店のうどん屋が鳥のように並んで、仲士

達が立ったまま、つるつるとうどんを吸っていた。

露店の硝子箱ガラスばこには、煎餅せんべいや、天麩羅がうまさうであつた。

私は硝子箱もたに凭れて、煎餅と天麩羅をじつと覗のぞいた。硝子箱の肌はだには霧がかかつていた。

「どこの子なア、そこへ凭れちやいけんがのう！」

乳房ちぶさを出した女が赤ん坊あかぼうの鼻汁はなじるを啜りながら私を叱しかつた。

4 山の朱い寺の塔とうに灯がとぼつた。島の背中から鰯いわしぐも雲が湧わいて、私は唄うたをうたいながら、波止場の方へ歩いた。

栈橋には灯がついたのか、長い竿さおの先きに籠かごをつけた物売りが、

白い汽船の船腹をかこんで声高く叫^{さけ}んでいた。

母は待合所の方を見上げながら、棧橋の荷物の上に凭^よっていた。

「何ばしよつたと、お父さん見て来たとか？」

「うん、見て来た！ 山のごツ売れよつた」

「ほんまな？」

「ほんま！」

私の腰に、また紫の包みをくくりつけてくれながら、母の眼は嬉^{うれ}し氣^げであつた。

「ぬくうなつた、風がぬるぬるしよる」

「小便^{せうべん}がしたか」

「かまうこたなか、そこへせいよ」

棧橋の下にはたくさん藻や塵芥が浮いていた。その藻や塵芥の下を潜くぐって影かげのような魚がヒラヒラ動いている。帰つて来た船が鳩はとのように胸をふくらませた。その船の吃水線きつすいせんに潮が盛り上ると、空には薄い月が出た。

「馬の小便こようのごつある」

「ほんでも、長いこと、きばつとつたとじゃもの」

私は、あんまり長い小便にあいそをつかしながら、うんと力んで自分の股間こかんを覗いてみた。白いプクプクした小山の向うに、空と船が逆ささかに写っていた。私は首筋が痛くなるほど身を曲かめた。白い小山の向うから霧を散らした尿いばりが、キラキラ光って棧橋をぬらしている。

「何しよるとじやろ、墜^おちたら知らんぞ、ほら、お父さんが戻^{もど}つて来よるが」

「ほんまか？」

「ほんまよ」

股間を心地^{こころち}よく海風が吹いた。

「くたびれなはったろう？」

母がこう叫ぶと、父は手拭で頭をふきながら、雁木の上の方から、私達を呼んだ。

「うどんでも食わんか？」

私は母の両手を握って振った。

「嬉しいか！ お父さん、山のごつ売ったとじやろなア……………」

私達三人は、露店のバンコに腰をかけて、うどんを食べた。私の丼どんぶりの中には三角の油揚げが這入っていた。

「どうしてお父さんのもの、お母さんのもの、狐きつねがはいつとらんと？」

「やかましいか！ 子供は黙だまって食うがまし……」

私は一片の油揚げを父の丼の中へ投げ入れてニヤツと笑った。父は甘美うまそうにそれを食った。

「珍めづらしかとじやろな、二三日泊とまって見たらどうかな」

「初め、癢兵はいへいじやろう云いよったが、風琴を鳴らして、ハイカラじゃ云う者もあつた」

「ほうな、勇ましか曲をひとつふたつ、聴きかしてやるとよかつた

に……」

私は、残ったうどんの汁に、湯をゆらゆらついで長いこと乳のように吸った。

町には輪のように灯がついた。市場が近いのか、頭の上に平たい桶おけを乗せた魚売りの女達が、「ばんより！　ばんよりはいいやんせんか」と呼び売りしながら通って行く。

「こりや、まあ、面白かところじゃ、汽車で見たりや、寺がおそろしく多かったが、漁師も多かもん、薬も売れようたい」

「ほんに、おかしか」

父は、白い銭をたくさん数えて母に渡した。

「のう……章魚の足が食いたかア」

「また、あげんこツ！ お父さんな、怒おこんなさつて、風琴ば海さ捨てる云いなはるばい」

「また、何、ぐずつちよるとか！」

父は、豆手帳の背中から鉛筆えんぴつを抜ぬいて、薬箱の中と照し合せていた。

5 夜になると、夜桜を見る人で山の上は群った蛾がのように賑にぎわった。私達は、駅に近い線路ぎわのはたごに落ちついて、汗ばんだまま腹這っていた。

「こりやもう、働きどうの多い町らしいぞ、桜を見ようとてお前、

どこの町であぎやん賑おうとつたか？」

「狂人どうが、何が桜かの、たまげたものじゃ」

別に気も浮かぬと云つた風に、風呂敷包みをときながら、母はフンと鼻で笑つた。

「ほう、お前も立つて、ここへ来てみいや、綺麗かぞ」

煤^{すす}けた低い障^{しょうじ}子を開けて、父は汚れたメリヤスのパッチをぬ

ぎながら、私を呼んだ。

「寿^{すし}司ば食いとうなるけに、見とうはなか……」

私は立とうともしなかつた。母はクツクツと笑つていた。腫^{はれも}

物の^のようにぶわぶわした^{たたみ}畳の上に腹這つて、母から読^{とく}本^{ほん}を出

してもらうと、私は大きい声を張りあげて、「ほごしよく」の一

部を朗読し始めた。母は、私が高い声で、すらすらと本を読む事が、自慢じまんでもあるのであろう。「ふん、そうかや」と、度々優しく返事をした。

「百ひやくしやう 姓は馬鹿ばかだな、 尺取虫しやくとりむしに土瓶どびんを引っかけるてかい？」

「尺取虫が木の枝えだのごつあるからじやろ」

「どぎやん虫かなア」

「田舎いなかへ行くとよくある虫じや」

「ふん、長いとじやろ？」

「蚕かいこのごつある」

「お父さん、ほんまに見たとか？」

「ほんまよ」

汚点^{しみ}だらけな壁に童子のような私の影が黒く写った。風が吹き込^こむたび、洋燈^{ランプ}のホヤの先きが燃え上つて、誰^{だれ}か「雨が近い」と云いながら町を通っている。

「まあ、こんな臭^へか部屋、なんぼうにきめなはった？」

「泊るだけでよかもの、六拾銭たい」

「たまげたなア、旅はむごいものじゃ」

あんまり静かなので、波の音が腹に這入^{ふとん}つて来るようだ。蒲団^{ふとん}は一組で三枚、私はいつものように、読本を持ったまま、沈黙^{だま}つて裾へはいつて横になった。

「おツ母さん！ もう晩な、何も食わんとかい？」

「もう、何ちやいらんとツ、蒲団にはいつたら、寝^ねないかんとツ」

「うどんば、食べたじやろが？ 白か錢ばたくさん持つちよつて、何も買うてやらんげに思うちよるが、宿屋も払うし、藥の間屋とんやへも払うてしまえば、あの白か錢は、のうなつてしまうがの、早よ寢て、早よ起きい、朝いなつたら、白かまんまいっぱい食べさすツでなア」

座蒲団を二つに折つて私の裾にさしあつてはいると、父はこう云つた。私は、白かまんまと云う言葉を聞くと、ポロポロと涙があふれた。

「背丈せたけが伸びる頃ころちうて、あぎゃん食いたかものじやろうかなア」
「早よウ、きまつて飯が食えるようにならな、何か、よか仕事はなかじやろか」

父も母も、裾に寝ている私が、なみだ涙を流していると云う事は知らぬ氣であつた。

「あれも、本ばよう読みよるで、どこかきまつたりや、学校さあげてやりたか」

「明日、もう一日売れたりや、ここへ坐すわつてもええが……」

「ここはええところじゃ、駅へ降りた時から、氣持ちが、ほんまによかつた。ここは何ちうてな？」

「尾おみちの道よ、云うてみい」

「おのみち、か？」

「海も山も近い、ええところじゃ」

母は立つて洋燈を消した。

6 この家の庭には、石榴ざくろの木が四五本あった。その石榴の木の下に、大きい囲いの浅い井戸いどがあつた。二階の縁えんの障子をあげると、その石榴の木と井戸が真下に見えた。井戸水は塩分を多分に含ふくんで、顔を洗うと、ちよつと舌が塩っぱかつた。水は二階のはんど甕がめの中へ、二日分位汲くみ入れた。縁側には、七輪や、馬穴バケツや、ゆきひらや、鮑あわびの植木鉢うえきばちや、座敷ざしきは六畳じようで、押入れもなければ床とこの間まもない。これが私達三人の落ちついた二階借りの部屋の風景である。

朝になると、借りた蒲団の上に白い風呂敷を掛けた。

階下は、五十位の夫婦者ふうふもので、古ぼけた俵くるまをいつも二台ほど土間に置いていた。おじさんが、俵をひっぱった姿は見た事はないが、誰かに貸すのででもあろう、時々、一台の俵が消える時がある。おばさんは毎日、石榴の木の見える縁側で、白い昆布こんぶに辻つじう占らを巻いて、帯を結ぶ内職をしていた。

ここの台所は、いつも落莫らくばくとして食物らしい匂においをかいだ事がない。井戸は、囲いが浅いので、よく猫ねこや犬が墜おちた。そのたび、おばさんは、禿はげの多い鏡を上から照らして、深い井戸の中を覗いた。

「尾の道の町に、何か力があつとじやろ、大阪おおさかまで行かいでよかつた」

「大阪まで行つとれば、ほんのこて今頃は苦勞しよつとじやろ」

この頃、父も母も、少し肥えたかのように、私の眼にうつた。私は毎日いっぱい飯を食つた。嬉しい日が続いた。

「腹が固うなるほど、食うちよれ、まんまさえ食うちよりや、心配なか」

「のう——おツ母さん！ 階下のおばさんたち、飯食うちよるじやろか？」

「どうして？ 食うちよらな動けんがの」

「ほんでも、昨夜な、便所へはいつちよつたら、おじさんが、おばさんに、俵も持つて行かせ、俺おれはこのまま死んだ方がまし、云うてな、泣きよんなはつた」

「ほうかや！　あの俵も金貸しにばし、取られなはったとじやろ」

「親類は、あつとじやろか、飯食いなはるとこ、見たことなか」

「そぎゃんこツ云うもんじやなかツ、階下のおじさんな、若い時
船へ乗りよんなはつて、機械で足ば折んなはったと才、誰っちゃ
見てくれんけん、おばさんが昆布巻きするきりで、食うて行きな
はるとだい、可哀^{かわい}そうだろうがや」

「警察へ行つても駄目^{だめ}かや？」

「誰もそんな事知らんと云うて、皆^{みな}、笑いまくるぞ」

「それでも、悪いこつすれば怒るだろう？」

「誰がや？」

「人の足折つて、知らん顔しちよるもんがよ才」

「金を持つちよるけに、かなわんたい」

「階下のおじさんな、馬鹿たれか？」

「何ば云よつとか！」

父は風琴と弁当を持って、一日中、「オイチニイ　オイチニイ」と、町を流して薬を売って歩いた。

「漁師町に行ってみい、オイチニイの薬が来たいうて、皆出て来るけに」

「風^{ふうてい}体が珍しかけにな」

長いこと晴れた日が続いた。

山では桜の花が散つて、いつせいに四囲あたりが青ばんで来た。
 遠くで初はつがえる蛙も啼ないた。白い除虫菊じょちゅうぎくの花も咲さいた。

7 「学校へ行かんか？」

ある日、山の茶園で、薔薇ばらの花を折つて来て石榴の根元に植え
 ていたら、商売から帰つた父が、井戸端いどばたで顔を洗いながら、私に
 こう云つた。

「学校か？ 十三にもなつて、五年生にはいるものはなかもの、
 行かぬ」

「学校へ行つとりや、ええことがあるに」

「六年生に入れてくれるかな？」

「沈黙^{だま}つとりや、六年生でも入れようたい、よう読めるとじやも

の……」

「それでも、算術はむずかしかな？」

「ま、勉強せい、明日は連れて行つてやる」

学校に行けることは、不安なようで嬉しい事であつた。その晩、胸がドキドキして、私は子供らしく、いつまでも瞼^{まぶた}の裏に浮んで来る白い数字を数えていた。

十二時頃でもあつたであろうか、ウトウトしかけていると、裏の井戸で、重石^{おもし}か何か墜ちたように凄まじい水音^{すゐ}がした。犬も猫も、井戸が深いので今までは墜ちこんでも嘗めるような水音し

かしいのに、それは、聞き馴れない大きい水音であつた。

「おツ母さん！ 何じやろか？」

「起きとつたか、何じやろかのう……」

そう話しあっている時、また水をはねて、何か悲しげな叫び声があがつた。階下のおじさんが、わめきながら座敷を這っている。

「あんた！ 起きまっせ！ 井戸ん中へ誰か墜ちたらしかつ」

「誰が？」

「起きて、早よう行つてくれまっせ、おばさんかも判らんけに……」

……

私は体がガタガタ震えて、もう、ものが云えなかった。

「どぎやんしたとじやろか？」

「お前も一緒にいっしょ来いや、こまい者は寝とらんかッ！」

父はどな呶鳴りながら梯子段はしごだんを破るようにドンドン降りて行つた。

私一人になると、周囲から空気が圧して来た。私はたまらなくなつて、雨戸を開き、障子を開けた。

石榴の葉が、ツンツン豆の葉のように光つて、山の上にぼん盆のような朱い月が出ている。肌の上を何かついと走つた。

「どぎゃん、したかアい！」

思わず私は声をあげて下へ叫んでみた。

母が、鏡と洋燈を持つているのが見えた。

「ハイ！ この縄を一生いっしょうけんめい懸命握つとんないはい」

父はこうわめきながら、縄の先を、真中まんなかの石榴の幹へ結んで

いた。

「いま、うちで、はいりますにな、辛抱^{しんぼう}して、縄へさばつて下さいや」

おろおろした母の声も聞えた。

「まさこ！ 降りてこいよッ」

父は覗いている私を見上げて呶鳴った。私は寒いので、父の、黄色い筋のはいった服を背中にひっかけると、転げるように井戸端へ降りて行つた。縁側ではおじさんが「うはははははうはははははは」と、泡^{あわ}を食つたような声で呶鳴っていた。

「ええ子じゃけに、医者へ走って行け、おとなしう云うて来るんぞ」

石畳の上は、淡い燈のあかりでぬるぬる光っていた。温い夜風が、皆の裾を吹いて行く。井戸の中には、幾本も縄がさがって「ううん、ううん」唸り声が湧いていた。

「早よう行つて来ぬか！ 何しよつとか？」

私は、見当もつかない夜更けの町へ出た。波と風の音がして、町中、腥い臭いが流れていた。小満の季節らしく、三味線の音のようなものが遠くから聞えて来る。

いつから、手を通していたのであろうか、首のところで、釦をとめて、私は父の道化た憲兵の服を着ていた。そのためだろうか、街角の医者家を叩くと、俤夫は寝呆けて私がいまだかつて、聞いた事がないほどな丁寧な物言い、いんぎんに小腰を曲めた。

「よろしうござりますとも、一時でありましようとも、二時でありましようとも、医者役目でござります故、私さえ走るならば、先生も起きましようし、じき、上りますでござります」

8 井戸へ墜ちたおばさんは、片手にびしょびしょの風呂敷包みを抱^だいて上つて来た。その黒い風呂敷包みの中には繻^{しゅ}子の鯨^{くじら}帯^{おび}と、おじさんが船乗り時代に買ったという、ラッコの毛皮の帽子がはいっていた。おばさんは、夜更けを待つて、裏口から質屋へ行く途^{とちゆう}中^{ちゆう}でもあつたのであろう。おばさんの帯の間から質屋の通いがおちた。母は「このひとも苦勞しなはる」と、思つ

たのか、その通いを、医者に見ぬように隠した。

「あぶないところであつた」

「よかりましょうか？」

「打身をしたらぬから、血の道さえおこらねば、このままでよろしかろ」

一度は食べてみたいと思つたお婆さんの、内職の昆布が、部屋の隅に散乱していた。五ツ六ツ私は口に入れた。山椒^{さんしょう}がヒリツと舌をさした。

「生きてあがつたとじゃから、井戸^{さくら}浚えもせんでよかろ」

朝、その水で私達は口をガラガラ嗽^{すす}いだ。井戸の中には、お婆

さんの下駄げたが浮いていた。私は禿はげた鏡を借りて来て、井戸の中を照らしながら、下駄を筴さるで引きあげた。母は、石囲いの四ツ角に、小さい盛塩もりじおをして「オンバラジャア、ユウセイソワカ」と掌を合しておがんだ。

曇くもり日で、雨らしい風が吹いている。

父は、着物の上から、下のおじさんの汚れた小倉こくらの袴はかまをはいて、私を連れて、山の小学校へ行った。

小学校へ行く途中、神武天皇を祭った神社があつた。その神社の裏に陸橋があつて、下を汽車が走っていた。

「これへ乗って行きやア、東京まで、沈黙だまっちよつても行けるんぞ」

「東京から、先の方は行けんか？」

「夷^{えびす}の住んどるけに、女子供は行けぬ」

「東京から先は海か？」

「ハテ、お父さんも行ったこたなかよ」

随分^{ずいぶん}、石段の多い学校であつた。父は石段の途中で何度も休

んだ。学校の庭は沙漠^{さばく}のように広がつた。四隅^{よすみ}に花壇^{かだん}があつて、

ゆすらうめ、鉄線蓮^{てっせんれん}、おんじ、薊^{あざみ}、ルピナス、躑躅^{つづじ}、いちはつ、

などのようなものが植えてあつた。

校舎の上には、山の背が見えた。振り返ると、海が霞^{かす}んで、近

くに島がいくつも見えた。

「待つとれや」

父は、袴の結び紐ひもの上に手を組んで、教員室の白い門の中へはいって行った。——よつぽど柳には性のあつた土地と見えて、この庭の真中にも、柔かい芽を出した大きい、柳の木が一本、羊のようにフラフラ背を揺ゆっていた。

廻かいせん旋木にさわつてみたり、遊動円木に乗つてみたり、私は新しい学校の匂いをかいだ。だが、なぜか、うつとうしい気持ちがしていた。このまま走つて、石段を駈かけ降りようかと、学校の門の外へ出たが、父が、「ヨオイ！」と私を呼んだので、私は水から上った鳥のように身震いして教員室の門をくぐつた。

教員室には、二列になつて、カナリヤの巣すのような小さい本箱が並んでいた。真中に火鉢があつた。そこに、父と校長が並んで

いた。父は、私の顔を見ると、いんぎんにおじぎをした。だから、私も、おじぎをしなければならぬのだらうと、丁寧に最敬礼をした。校長は満足気であつた。

「教室へ連れて行きましょう」

「ほんなら、私はこれで失礼いたします。何ともハヤ、よろしく
お願い申し上げます」

父が門から去ると私は悲しくなつた。校長は背の高い人であつた。私はどこかの学校で覚えた、「七尺下^{さが}つて師の影を踏^ふまず」と、云う言葉を思い出したので、遠くの方から、校長の後へついて行つた。

「道草食わずと、早よう歩かんか！」

校長は振り返って私を叱った。窓の外のポンプ井戸の水溜り^{みずたま}で、何かカロカロ……鳴いていた。

雨戸のような歪んだ扉^{ゆがとびら}を開けると、ワアンと子供達の息が私にかかった。（女子六年　イ組）と、黒板の上に札^{ふだ}が下っていた。私は五年を半分飛ばして六年にあがる事が出来た。ちよつと不安であつた。

9　長い間雨が続いた。

私はだんだん学校へ行く事が厭^{いや}になった。学校に馴れると、子供達は、寄つてたかつて私の事を「オイチニイの新馬鹿大将の娘

じゃ」と、云った。

私はチャップリンの新馬鹿大将と、父の姿とは、似つかないものだと思っていた。それ故、私は、いつか、父にその話をしようと思ったが、父は長い雨で腐り切っていた。

黄色い粟飯あわめしが続いた。私は飯を食べるごとに、厩うまやを聯想れんそうし

なければならなかった。私は学校では、弁当を食べなかった。弁当の時間は唱歌室にはいつてオルガンを鳴らした。私は、父の風琴の譜ふで、オルガンを上手に弾ひいた。

私は、言葉が乱暴なので、よく先生に叱られた。先生は、三十を過ぎた太った女のひとであつた。いつも前髪の大きい庇ひさしから、雑巾ぞうきんのような毛束けたばを覗かしていた。

「東京語をつかわねばなりませんよ」

それで、みんな、「うちはね」と云う美しい言葉を使い出した。

私は、それを時々失念して、「わしはね」と、云つては皆に嘲ち笑しょうされた。学校へ行くと、見た事もない美しい花と、石版絵

がたくさん見られて楽しみであつたが、大勢の子供達は、いつまでたつても、私に対して、「新馬鹿大将」を止めなかつた。

「もう学校さ行きとうはなか？」

「小学校だきや出とらんな、おツ母さんば見てみい、本も読めんけん、いつもかつも、眠ねむつとろうがや」

「ほんでも、うるそうして……」

「何がうるさかと？」

「云わん！」

「云わんか？」

「云いとうはなか！」

刀で剪^きりたくなるほど、雨が毎日毎日続いた。階下のおばさんは、毎日昆布の中に辻占と山椒を入れて帯を結んでいた。もう、黄いろいご飯も途絶え勝ちになった。母は、階下のおばさんに荷札に針金を通す仕事を探してもらった。父と母と競争すると母の方が針金を通すのは上手であった。

私は学校へ行くふりをして学校の裏の山へ行った。ネルの着物を通して山肌がくくん匂っている。雨が降って来ると、風呂敷で頭をおおうて、松の幹^{まつ}に凭れて遊んだ。

天気の良い日であつた。山へ登つて、萩^{はぎ}の株の蔭^{かげ}へ寝ころんでいたら、体操の先生のように髪を長くした男が、お梅^{うめ}さんと云う米屋の娘と遊んでいた。恥^はずかしい事だと思つたのか私は山を降りた。真珠色^{しんじゅいろ}に光つた海の色が、チカチカ眼をさした。

父と母が、「大阪の方へ行つてみるか」と云う風な事をよく話しだした。私は、大阪の方へ行きたくないと思つた。いつの間にか、父の憲兵服も無くなつていた。だから風琴がなくなつた時の事を考えると、私は胸に塩^{うま}が埋つたやうで悲しかった。

「俵でも引っぱつてみるか？」

父が、腐り切つてこう云つた。その頃、私は好きな男の子があ

ったので、なんぼうにもそれは恥ずかしい事であつた。その好きな男の子は、魚屋のせがれであつた。いつか、その魚屋の前を通つていたら、知りもしないのに、その子は私に呼びかけた。

「魚が、こぎやん、えつと、えつと、釣^つれたんどう、一尾^びやろうか、何がええんな」

「ちぬご」

「ちぬごか、あぎやんもんがええんか」

家の中は誰もいなかった。男の子は鼻水をずるずる吸りながら、ちぬごを新聞で包んでくれた。ちぬごは、まだぴちぴちして鱗が銀色に光っていた。

「何枚着とるんな」

「着物か？」

「うん」

「ぬくいけん何枚も着とらん」

「どら、衿を数えてみてやろ」

男の子は、腥い手で私の衿を数えた。数え終ると、皮剥かわはぎと云う魚を指差して、「これも、えつとやろか」と云った。

「魚、わしや、何でも好きじやんで」

「魚屋はええど、魚ばア食える」

男の子は、いつか、自分の家の船で釣りに連れて行つてやると云った。私は胸に血がこみあげて来るように息苦しさを感じた。

学校へあく翌る日行つてみたら、その子は五年生の組長であつた。

「誰の紹介しょうかいであつたか、父は、どれでも一瓶ひとびん拾錢しせんの化粧水しょうすいを仕入れて来た。青い瓶もあつた。紅あかい瓶も、黄いろい瓶も、みな美しい姿をしていた。模様には、ライラックの花がついて、きつく振ると、瓶の底から、うどん粉のような雲があがつた。

「まあ、美しか！」

「拾錢じゃ云うたら、娘達や買いたかろ」

「わしでも買いたか」

「生意気なこと云いよる」

父はこの化粧水しょうすいを売るについて、この様な唄をどこからか習つて来た。

一瓶つければ桜色

二瓶つければ雪の肌

諸君！ 買ったまえ

買わなきや炭団たどんとなるばかりかし。

父は、この節に合せて、風琴を鳴らす事に、五日もかかつてしまった。

「早よう売らな腐る云いよった」

「そぎゃん、ひどかもん売つてもよかるか？」

「ハテ、良かるか、悪かるか、食えんもな、仕様がなかじやなツか」

尾の道の町はずれに吉和よしわと云う村があつた。帆布工場はんぷもあつて、女工や、漁師の女達がたくさんいた。父はよくそこへ出掛けて行つた。

私は、こういうハイカラな商売は好きだと思つた。私は、赤い瓶を一ツ盗ぬすんで、はんど甕の横に隠しておいた。

「時勢が進むと、安うて、ハイカラなものが出来るもんかなア」
町中「一瓶つけければ桜色」の唄はやが流行つた。化粧水は、持つて出るたび、よく売れて行つた。

その頃、籠の中へ、牛肉を入れて売って歩く婆さんが来た。もうけがあるのであろう、母は気前よく、よくそれを買つた。蒟こんにやくを入れると、血のような色になって、「犬の肉でもあつと

じやろ」と、三人とも安いのでよく、その赤い肉を食った。

「やっぱし、犬の肉でやんすで」

階下のおばさんは、買った肉を犬にくれたら、やっぱし食わなかったと、それが犬の肉である事を保証した。

雨がカラリと霽^はれた日が来た。ある日、山の学校から帰って来ると、母が、息を詰めて泣いていた。

「どぎゃん、したと？」

「お父さんが、のう……警察い行きなはった」

私は、この時の悲しみを、一生忘れないだろう。通草^{あけび}のように

瞼が重くなった。

「おツ母さんな、警察い、ちよつと行って来ツで、ええ子して待

つとれ」

「わしも行く。——わしも云うたい、お父さん帰るごと」

「子供が行ったつちや、おごろるるばかり、待つとれ！」

「うんにや！ うんにや！ 一人じゃ淋^{さび}しか！」

「ビンタばやろかいッ！」

母が出て行つた後、私は、オイオイ泣いた。階下のおばさんが、這い上つて来て、一緒に傍に横になつてくれても、私は声をあげて泣いた。

「お父さんが云わしたばい、あア、おばっさん！ 戦争の時、^{んづめ}詰に石ぶち込んで、成金^{すなつぶ}さなつたものもあるとじやもの、俺がとは砂粒^{すなつぶ}よか、こまかいことじや云うて……」

「泣きなはん、お父さんは、ちつとも悪うはなかりやん、あれは製造する者が悪いんじやけのう」

「どぎやんしても俺や泣く！ 飯ば食えんじやなつか！」

私は、夕方町の中の警察へ走って行つた。

唐からくさ草模様のついた鉄の扉に凭れて、父と母が出て来るのを待

つた。「オンバラジャア、ユウセイソワカ」私は、鉄の棒を握つて、何となく空に祈いのつた。

淋しくなつた。

裏側の水上署でカラカラ鈴すずの鳴る音が聞える。

私は裏側へ廻まわつて、水色のペンキ塗ぬりの歪んだ窓へよじ登つて

下を覗いてみた。

電気が煌々こうこうとついていた。部屋の隅に母が鼠ねずみよりも小さく私の眼に写った。父が、その母の前で、巡査じゅんさにびしびしビンタを殴られていた。

「さあ、唄うてみんなか！」

父は、奇妙きみような声で、風琴を鳴らしながら、

「二瓶つければ雪の肌」と、唄をうたった。

「もっと大きな声で唄わんかッ！」

「ハッハッ……うどん粉つけて、雪の肌いなりやア、安かものじや」

悲しさがこみあげて来た。父は闇雲やみくもに、巡査に、ビンタをぶたれていた。

「馬鹿たれ！　馬鹿たれ！」

私は猿さるのように声をあげると、海岸の方へ走って行った。

「まさこヨイ！」と呼ぶ、母の声を聞いたが、私の耳底には、いつまでも何か遠く、齒車のようなものがギリギリ鳴っていた。

（昭和六年四月）

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 林芙美子」筑摩書房

1992（平成4）年12月18日第1刷発行

底本の親本：「現代日本文学大系 69」筑摩書房

1969（昭和44）年

初出：「改造」

1931（昭和6）年4月

入力：土屋隆

校正：林幸雄

2006年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風琴と魚の町

林芙美子

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>